

音響ドラマ制作サークル おにぎりワゴン

## 「LAST desire ーラスト・ディザイアー」第一話

### 登場キャラクター一覧

- ・ 神崎 正斗
- ・ 久留巳 勇希
- ・ 諏訪 京也
- ・ ナビイ||α
- ・ 凜海アナウンサー
- ・ 男性アナウンサー
- ・ 正斗（幼少）
- ・ 正斗の母
- ・ 正斗の父
- ・ 女子生徒A
- ・ 女子生徒B

正斗M 「何かを望めば、何かが変化する。」

それは、決して自分が望んだ変化だとは限らない。

……だから僕は、何も望まないことを、あの時決めたんだ」(モノローグ)

場面切り替え

SE…ジジツというノイズ音

※第一話終盤部分のシーン※

仮想世界『ラスト・デザイナー』。

夜、中学校の屋上。現実と見分けがつかないほど、正確に構築されたフィールド。

SE…夜の冷たい風が、ぶわあっとふく。

屋上には、正斗・勇希・健・十夜・α・βがいる。

2

勇希 「よお、お前が私の相棒ってわけか」

正斗 「え……、君、は？」(突然のことで驚いている)

勇希 「私の名前は久留巳勇希。さっそくだが相棒、私を全力で守ってくれ！」  
(ハツラツと)

場面切り替え

SE…ジジツというノイズ音

※ 以下、テレビ番組の内容 ※

朝の情報番組『朝めざまし』。(めざましテレビをモデルにしています)

話題の人にインタビューをするコーナー「話題を先取りーん！」が始まる。

男アナ 「続いてのコーナーです。凜海アナお願いします」

凜海 「はい。ではタイトルコールいきますよ！ 『凜海佐和子の、話題を先取りーん！』」

タイトルコールの後、VTRに切り替わる。

凜海アナのナレーションとともに映像が流れる。

凜海 「今話題の人物に突撃インタビューする『話題を先取りーん』。

今回は、今大注目のゲーム会社「MOO」の取締役社長、諏訪京也さんに突撃インタビューをしてきました！」(ナレーション／元気に可愛らしく)

凜海 「ゲーム会社「MOO」とは。2025年に設立されたゲーム制作会社で、その斬新な発想から生まれたゲームは日本国内だけではなく、

海外でも注目を集め、たった五年で大手ゲーム会社と肩を並べるまでに

成長！ そして昨年一二月には、仮想空間へダイブできる世界初のゲーム機

『メデイカル・コア』を発売！ 発売後たった半年で、

全世界で約三百万台の売上を達成！ ゲーム業界に革命を起こしたとして世界的に注目を集めています」

凜海 「そんな話題のMOOの社長、諏訪京也さんにヒットの秘訣や、制作裏話、

プライベートまで、わたくし凜海佐和子がインタビューしてきました！」

「ここから、インタビューの様子を映した映像が流れる。」

凧海 「お忙しい中、お越しいただきありがとうございます」

諏訪 「いえいえ、国民的情報番組の『朝めざ』に呼んでいただけて光栄です」

凧海 「そんな、恐縮です。本日はよろしくお願いします」

諏訪 「僕、テレビのインタビューなんて初めてなので、お手柔らかにお願いします」

凧海 「とても物腰柔らかな諏訪さん。」

「さっそくメデイカル・コアについてお話を伺いました」(ナレーション)

凧海 「現在大人気の『メデイカル・コア』ですが、開発のきっかけ等は

何かあったんでしょうか？」

諏訪 「ん〜、なんだったかなあ。」

「この五年間夢中で作っていたから、忘れちゃいましたね」(冗談めかしに)

凧海 「ええ本当ですか？ 企業秘密、ということでしょうか？」

諏訪 「ああ、企業秘密、その言い方かっこいいですねえ」

凧海 「ははっ、先ほど五年前から作られていたとおっしゃっていましたが、五年前といえばちょうどMOOを設立した時期と被りますが」

諏訪 「そうですね。ぶっちゃけ、メデイカル・コアを作るために会社を作ったようなものなのでね」

凧海 「え、そうなんですか？」

諏訪 「ええ。……ああ、そうだそうだ。きつかけ思い出しました。昔見たアニメ、えくつとタイトルなんだったかな。」

「そのアニメは、主人公たちがゲームの世界に迷い込んだりなんですよ。現実ではありえない魔法が使えたり、モンスターと戦ったり。」

それを見た幼い僕は『ゲームの中に入りたい』って思ったんですよ。でもいつまで経ってもゲームの世界に迷い込めなかった。

まあ当たり前なんですけどね？」

「ははっ」

諏訪 「だから自分で作っちゃおうって思ったんです。ディスプレイ越しじゃなくて、自らが主人公となって生きることが出来るゲームをね」

「ということは、小さい頃の夢をかなえられた、ということですね。すごいです！」

諏訪 「はは、凜海さんにそう言われたらなんだか嬉しいなあ。

実は、凜海さんの大ファンなんですよ」

凜海 「え、そうなんですか！ あ、ありがとうございます、恐縮です」

諏訪 「だから今日、実はすごく緊張してるんです」

凜海 「緊張しているようにはとても見えませんよお。すらっとしていて、何よりも

オーラがすごいです！」

諏訪 「オーラ？」（笑いながら）

凜海 「はい。何かを成し遂げた人のオーラを感じます！」

諏訪 「はは、凜海さんとそういうところが大好きなんですよ」（笑いながら）

凜海 「諏訪さんに褒められ、インタビューを忘れ、照れてしまった私。

なんとか話題を戻し、続いてはヒットの秘訣について伺いました」

（ナレーション）

諏訪 「うーん、秘訣というのは特にはないですかねえ。

まず、商品として販売するまでがとても大変でした」

凜海 「そうだったんですか」

諏訪 「メデイカル・コアは、人間の脳を錯覚をさせることによって

直接ゲームで自分が動いているという感覚を実現させています。

錯覚させるような信号を送るのは危険だ、ということでも  
審査が中々通らなかつたんですよ」

凛海 「なるほど。脳に異常が起きてしまう可能性があるのではないかという  
危険性があつたつてことですね」

諏訪 「そう。だから、危険性がほぼゼロであることを証明するために、  
そりやもう数え切れないほど実験を行いました。開発成功から一年後に  
ようやく容認され、販売ができたんです」

凛海 「諏訪さんたち開発された方々の熱い思いと努力で、  
世に出ることができたんですね」

諏訪 「はい。それがありがたい事に世界で認められ始めていて、  
自分たちがやってきたことは間違っていないかつたんだと、確信を持ちました」

凛海 「それはやはり、諏訪さんの開発するきっかけとなった、  
『ゲームの世界に行きたい』という想いを、  
皆どこかに持っていたからかもしれないですね」

諏訪 「そうだとより嬉しいですね」

凛海 「実は、今日ここに来る前に、メディカル・コアを体験させていただいたんです  
が本当に素晴らしかつたです。感想が月並みで申し訳ないんですが、  
自分が仮想世界で実際に動く感覚が、新鮮で、けれど決して違和感がなくて、  
ああ、人間はここまで来たんだな、と感動しました」

諏訪 「はは、嬉しいです。メディカル・コアは今はまだゲーム色が強いんです  
ですが、ゆくゆくは社会貢献に繋げていきたいと考えています」

凛海 「社会貢献ですか？」

諏訪 「ええ。メディカル・コアは、脳で『こう動きたい』と思えば動けます。  
そして、実際に声を出さなくても、仮想世界で話すことができます。  
それを応用すれば、障害を持った方々のなにか助けになるんじゃないか、  
と考え、現在さらに開発を進めています」

凜海 「それが実現する事ができれば、例えば、声を出すことが出来ない人も仮想世界内で人と簡単に話すことができたりするってことですか？」

諏訪 「はい。より人間同士のコミュニケーションが取りやすくなると考えています」

凜海 「すごい。まさに革命、ですね」

諏訪 「はは。問題点が多くて大変ですけどね。

ゲームとしてのメデイカル・コアも、

まだまだ改良していかなければいけませんし」

凜海 「今後のMOOにも目が離せませんね」

諏訪 「ええ。ぜひ目を離さず常に注目され続けるよう努めたいと思っています」

凜海 「そして話は諏訪さんのプライベートな話に……」（ナレーション）

凜海 「諏訪さんは普段、休日は何をして過ごしてらっしゃるんですか？」

諏訪 「うーん、普通ですよ。本を読んだり、家で映画を見たり。

あんまり外には出ないかなあ」

凜海 「空いた時間を見つけては色んなところに旅行に行っているイメージがありました」

諏訪 「はは、自家用ジェットを使って？」

凜海 「そうですね、そんな感じですよ！」

諏訪 「はは、海外の富豪みたいなイメージなんですね、僕って」

凜海 「オーラがありますからね」（笑いながら）

諏訪 「出た、オーラっ。いいですねえ。凜海さん本当に素敵だ」（笑いながら）

※ 「」までテレビの音 ※

テレビも見つつ、朝食をとっている正斗と諏訪。

諏訪のインタビューが始まり、二人が話し始める。

諏訪 「う〜ん、ねえ正斗君。僕カメラ映り悪くない？」

正斗 「そう？ 普通だよ普通」(食パンを食べながら)

諏訪 「普通かな〜。な〜んか太って見えるんだよね〜。目も細いし」

正斗 「テレビなんてそういうもんだって。それに目が細いのは元々でしょ？」

……。でも、なんだか信じられないなあ。

目の前に座ってる人が『朝めざ』に出てるなんて

諏訪 「僕も信じられないよ。かつこよさが半減されててね」

正斗 「あ〜はいはい」

二人、テレビを見ている。

諏訪 「凛海さんとても美人だったな〜。ぜひまた会いたいよ」

正斗 「それ姉さんの前で絶対に言わないほうがいいよ。あの人結構プライド高いから」

諏訪 「百も承知さ。良美さんの耳にでも入った日には、

東京湾に長身のイケメンが浮かぶことになるからね」(ドヤ顔)

正斗 「ははは……。で、その姉さんはいつ旅行から帰ってくるの？」

諏訪 「一ヶ月はアイルランドにいるって言っていたかな」

正斗 「はあ、姉さんホント自由だよね。やっど結婚したっていうのに」

諏訪 「それが彼女の良ささ。自由奔放で縛られていない。

僕を縛ることもないしね」(コーヒーを飲みつつ)

正斗 「そっか。……(テレビに目を移して)



ホントすごいね。メデイカル・コア」

諏訪 「ん？ ああ。ここまで話題になるのは想定内だけだね」(コーヒーを飲みつつ)

正斗 「でもこれからが大変じゃない？」

他のゲーム会社がどんどん似たような商品作るだろうし」

諏訪 「ふふ、それは心配いらないよ」

正斗 「どうして？」

諏訪 「絶対に、他では作れないからさ。」

いや、理解できない、と言ったほうが正しいかな」

正斗 「それどういう意味？」

諏訪 「おっといけない。そろそろ出る時間だ」(正斗の言葉を遮るように)

**諏訪、立ち上がり上着を着て、カバンを持つ。**

諏訪 「朝食ごちそうさま。いつもどおり、とても美味しかったよ」

正斗 「はは、お粗末さまでした」

諏訪 「あ、正斗君。学校終わった後のご予定は？」

正斗 「ん？ 真つすぐ家に帰ると思うよ」

諏訪 「そうか、それはよかった。正斗君にプレゼントがあるんだ。また夕方にくるよ」

正斗 「プレゼント？ この前の誕生日の時にもらったばかりだよ？」

諏訪 「何でもない日のプレゼントも、悪くないだろ？」

正斗 「……そういうのは女性相手に言いなよ」(ドン引き)

諏訪 「もう、つれないな」

正斗 「それにプレゼントなんて、

諏訪さんには十分すぎるくらいお世話になってるのに」

諏訪 「子どもは子どもらしく、大人に与えられたものを

素直に喜ばなくちゃいけないよ。それが、子どもの仕事さ。」

それじゃ、行ってくるよ。また夕方に」

正斗 「はい、いってらっしゃい。頑張ってるね」

諏訪、リビングを出て玄関へ向かい、家を出る。

正斗、テレビの電源を切る。(リモコンで)

正斗 「子どもは子どもらしく……か」

正斗、十年前世界した両親の音が頭に流れる。

**※以下、正斗の回想※**

正斗幼少 「だから！　なんで忘れちゃったの！？　僕、ちゃんと聞いたもん！」

正斗の母 「ごめんね。どうしても思い出せないの。もう一回教えて？」

今から買いに行くから」

正斗幼少 「じゃあ早く買ってきて！　思い出して買ってきて！」

正斗の母 「……」

正斗の父 「正斗、来年には小学生なんだから、

お母さんを困らせるようなこと言っちゃだめだろ？」

正斗幼少 「知らない！　悪いのはお母さんだもん！　僕悪くない！

お母さんもお父さんも、大嫌いだ！」

**※以上、正斗の回想※**

回想、フェードアウトしていく。

過去の自分を思い出し、複雑な気持ちになる正斗。

正斗 「……。さてと、僕もそろそろ行くか」

1・4 正斗の家の駐車場

自分の車に乗り込む諏訪。携帯を取り出し、ナビィ達に電話をする。

諏訪 「もしもし、諏訪です。諏訪京です。……ええ、最後の一人、決まりましたよ。

僕の義理の弟なんですけどね。え？ いやいや、面白いと思っただけですよ。

もう、本当ですって。……これで十人全員が決まりましたね。

……今夜から始めましょうか」

エンジンをかけ、車が走り出す。

1・5 千鳥ヶ丘学園・一年E組・放課後

放課後を知らせるチャイムが鳴る。

部活に行く生徒、友だちたちと帰る生徒の音が響く。

女生徒A 「ん〜（背伸び） おわった〜！ ねえ、今日どっか寄ってかない？」

女生徒B 「いいね〜どこ行く？」

女生徒A 「うーん。（帰ろうとする正斗が目に入り）あ、正斗くん！」

正斗 「え？ 何？」

女生徒A 「今から遊びに行くんだけど、正斗くんもよかつたらどう？」

正斗 「あ〜、ごめん。今日、早く帰らないといけなくて」

女生徒A 「あ〜そっかあ」（残念そう）

女生徒B 「残念だったねえ？」（女生徒Aに小声で。ニヤニヤしつつ）

女生徒A 「うっさい」（女生徒Bに小声で）

正斗 「ホントごめんね。それじゃ、また明日」

## 1・6 学校の帰り道・正斗の家付近・住宅街

女生徒A 「うん、ばいばい」

**正斗、教室を出る。**

女生徒A 「あー今日もだめだったかー。ガード堅いな」

女生徒B 「勉強も運動もできて、付き合いやすくて。おまけにそこそこイケメンで。

非の打ちどころがないんだけど、どうも掴みどころがないよね、神崎くんって」

女生徒A 「そこがいいんだって！ わかってないな」(頬を膨らませて)

女生徒B 「はいはい。ほら、早く帰る準備して」

女生徒A 「はーい」

**帰り道。正斗、ひとりで帰りながらスマホでニュースを見ている。**

正斗 「……『ゲーム会社M.O.。ゲーム業界に変革をもたらした、

社長【諏訪京也】の秘密』……。

すごい。どのネットニュースにも諏訪さんの名前ばかり」

**正斗、家に着く。**

**駐車場に諏訪の車が止まっていることに気づく。**

正斗 「ん、諏訪さんの車だ」

正斗、ドアの鍵を開けて家に入る。

すると諏訪の靴がある。諏訪が来ていることを知る。

正斗 「あ、靴。やっぱりもう来てるんだ」

正斗靴を脱ぎ、リビングへと向かう。

リビングで誰かと話している諏訪の声が聞こえてくる。

諏訪 「ええ、大丈夫です。準備は、……はい。わかりました。

あとの進行はあなた方にお任せするということで、

はいはい、はい、それでは」(電話を切る)

諏訪の電話が終わるころに、正斗、リビングのドアを開けて入ってくる。

諏訪 「ん？ ああ正斗くん、おかえり」

正斗 「ただいま、早かったんだね」

諏訪 「色々と早めに終わってね。

まあ、すぐにまた会社に戻らないといけないんだけど」

正斗 「そうなんだ。やっぱり忙しい？」(カバンをソファに置きつつ)

諏訪 「まあね。とにかく取材が多くて多くて、本来の仕事がなかなかね。

ああ、そうだ。今朝言ってたプレゼント持ってきたよ」

正斗 「だから、いいって言ったのに……」(遠慮)

諏訪 「まあまあそう言わずに」

諏訪、カバンからメガネケースを取り出す。

諏訪 「はい」（メガネケースを開ける）

正斗 「ん？ これ、メガネ？」

諏訪 「ただのメガネじゃない。メディカル・コアの改良版だよ」

正斗 「え、ってことはこれがゲーム機？ 今出てるものと全然違うね」

諏訪 「今のメディカル・コアは、ヘッドフォンのようなデザインを採用したんだけど、重たくて長時間プレイできないという欠点があつてね。

で、改良して作ったのが、これさ」

正斗 「すごい。ほんとに普通のメガネみたい」

諏訪 「まだ正式に発表していない製品でね、

テストプレイヤーに渡しているものなんだよ」

正斗 「ああなるほど。僕にテストプレイヤーになれって？」

諏訪 「そういうこと。で、どうかな、やってくれる？」

正斗 「……。うん、やるよ。諏訪さんのお手伝い出来るなら」

諏訪 「……正斗君ならそう言ってくれると思つてたよ」

正斗 「で、なんのゲームが入ってるの？」

諏訪 「仮想世界『ラスト ディザイア』を舞台にした、

まあアクションゲームみたいなものさ」

正斗 「アクションゲーム、か……」

諏訪 「二人一組のチームとなつて、他のチームと戦つて勝ち残っていくゲームなんだ」

正斗 「へえ」

諏訪 「ただ二人で協力して戦う、というゲームじゃない。

戦うのは二人のうち一人だけ。一人が戦つて、もう一人はなにもしない」

正斗 「え？ 何もしないって、あ、サポートとか？」

諏訪 「いや、本当に何もしない。戦う側をリード、もう片方をガード。」

リードは自分のガードを守りつつ、相手のガードを3回攻撃できたら勝ちという、単純なゲームさ」

正斗 「へえ。じゃあガードは戦わないのか……それってゲームとしてどうなの？」

あ、ごめん」

諏訪 「あはは、説明だけ聞いたらそう思うのは当然さ。

ま、プレイしてみたら分かるよ」

正斗 「ねえ、これさっそくやってみてもいい？」

諏訪 「ああ良いとも。ゲームをプレイする時は、必ず背もたれのある椅子に座るか、ベッドで寝た態勢でもらうんだけど、そうだね、ソファアに座ろうか」

正斗 「わかった」

### 正斗ソファアに座る。

諏訪 「知っていると思うけど、メディカル・コアには、コントローラーや

キーボードはないから、ログインまでの操作は音声認識で行なうんだ。

まずは、メガネをかけて『メディカル・コア、オン』と言ってみて」

正斗 「な、なんか恥ずかしいな。……えっと、メディカル・コア、オン」

### 正斗の声に反応し、起動する。

### すると目の前に、ナビィllαが現れる。

α 「こんにちは！ ナビィllαだよお！」

正斗 「うわあ！ え、きゅ、急に目の前に……そ、それにう、浮いてる……？」

諏訪 「その子は、ゲームの進行役のナビィllαというキャラクターだよ。

見た目を少し機械的にしてみたんだ。

メディカル・コアのレンズを通してみると、

あたかも目の前にいるみたいに見えるだろ？」

正斗 「はあ……そういうことか、びっくりした」

**諏訪の携帯にメールが届く。**

諏訪 「おっと、ちよつとごめんね。

(携帯をポケットから取り出し、内容を確認する)

ごめん正斗くん、呼び出しがあったから、会社に戻らないと」

正斗 「ああ、そうなんだ。じゃあ、終わったらまたメールする」

諏訪 「本当は付き添いたかったんだけど、残念だ。

ゲームについてはナビイがある程度教えてくれるから安心してね。それじゃ」

正斗 「うん、頑張ってるね」

**諏訪急ぎ足で出ていく。**

正斗 「ふう……よし、やるか」

α 「ユーザー登録する？」

正斗 「え？ ああ、うん」

α 「りようか〜い！ それじゃあ、ユーザー情報の登録をしてもらおうよ！

結構入力事項が多いけどめげずに頑張ろ〜！ まず、君の名前を教えて！」

正斗 「えー、『神崎 正斗』」

α 「カンザキ マサト、だね！ 合ってるかな？」

正斗 「うん、合ってるよ」

α 「りようか〜い！ じゃあ次に、マサトの性別と年齢と誕生日を教えて！」

正斗 「えと、『男』、『16歳』、『5月5日』」

α 「男、16歳、5月5日、だね！ 合ってるかな？」



正斗 「うん」

α 「さあどどん質問していくよ！ 次に、君の身長・体重を教えて！」

正斗 「身長は確か…170センチで、体重は」

**声フェードアウトしていく。**

**少し質問部分をカット。質問終盤まで飛ばす。**

正斗 「ふう……」（少し疲れてきている）

α 「質問事項も終盤だ！ 頑張れ〜！ 次いくよ！

君の思い出深い場所を教えて！」

正斗 「思い出深い場所？」

α 「印象に残っている場所でもいいよ。直感で答えてね！」

正斗 「……えつと……。ここ、かな」

α 「ココ？ マサトが今いる場所ってことかな？」

正斗 「うん。自分の家」

α 「マサトの家、だね！ 合ってるかな？」

正斗 「うん」

α 「じゃあ次の質問！ マサトの『手に入れたいモノ』を教えて！」

正斗 「……え？」（質問内容に少し驚く）

**少しの沈黙**

α 「音声認識失敗！ もう一度聞くんね。マサトの『手に入れたいモノ』を教えて！」

正斗 「……うーん、ない、かな」

α 「ないんだね！ じゃあ『取り戻したいモノ』はある？」

正斗 「取り戻したいモノ？」

α 「昔失くした大切なおもちゃ、とか、死んでしまった人、とか！  
なんでもいいんだよ！」

正斗 「……はは、なにこの質問。死んでしまった人、つて。……」  
(両親をふと思い出す)

α 「この『ラスト デイザリア』では、勝ち残ればほしいものが手に入るんだ！  
手に入れたいモノや昔失くしてしまった、取り戻したいモノ！

君が望めば、なんでも願いが叶うんだよ！」

正斗 「……ああ、そういう設定のゲームなんだね。なんというか、  
……諏訪さんらしくない設定だな」

α 「さあ、マサトの欲しいモノ、教えて！」

正斗 「……。ごめん、やっぱり何もないや」

α 「ないんだね！ りょうかーい！ これで入力終了だよ！  
お疲れさま。このままゲームスタートするけど、いい？」

正斗 「うん」

α 「りょうかーい！ 登録中だよ。メディカル・コアは外さずにそのままの体勢で  
待っててね。登録中だよ。メディカル・コアは外さずにそのままの体勢で  
待っててね。……はい！ 登録完了！

ようこそ！ カンザキ マサト！ 僕らは君の参加を歓迎するよ！

『ラスト デイザリア』。自らの欲望と、仲間の欲望のため、全力で戦ってね！  
それじゃ、ゲーム・スタート！」

αの声に答えるように、スクリーンから眩いヒカリが溢れる。

正斗、思わず目をこらさる。

電子的な音が溢れる。何かが構築されていく音。

## 1・8 ラスト・デザイナー内・正斗の家のフィールド

正斗 「うわ！」

α 「フィールド構築中だよ！ 酔う確率68%！ 目を瞑って待機してね！」

正斗 「言われなくても眩しくて目開けてられないって」

α 「現在位置修正！ 誤差10%まで減少！ 最終チェック！ 問題なし！

フィールド構築スタート！ 13%、25%、42%、60%！

さあそろそろ出来るよお！ 3、2、1！ ゼロ〜！」

(スリー、トゥー、ワン)

αの『ゼロ』の声と共に、響き渡っていた電子的な音もフッと消える。

眩しい光もおさまる。

正斗 「……ん……、α……もう、目開けてもいい？」

α 「いいよ〜！」

正斗 「……ん……あれ」(目を開ける)

目を開く。

景色が変わってないことに気づく。

正斗 「何も、変わってない……僕の家だ……。いや、でも………何かが」

α 「ラスト・デザイナーの世界へようこそ！」

正斗 「うわあ！」(αの声に驚く)

α 「あはは！ 驚きすぎだよマサト」

正斗 「えっと……これ、もうゲーム始まつてるの？」

α 「うん。仮想世界へのリンク成功だね！ その証拠にほら！」

さっきまでかけてたメデイカル・コアがないでしょ？」

正斗 「あ、ホントだ(自分の顔を手で触りながら確認)。

でも、これが仮想世界？ 僕の想像だともっとこう、ファンタジーな感じを  
思い浮かべてたんだけど」

α 「この『ラスト・デザイナー』は、高度な技術により

現実世界に限りなく近いフィールドの構築が可能なんだ！

現実と見分けがつかないくらいにね！ すごいでしょ！」

正斗 「うん、すごい。家の中も全く一緒だ。本当にゲームの中なのか疑っちゃう……」

(少し興奮している)

α 「あはは！ マサトは良い反応をしてくれるね！

つてことで、さっそくだけどバトルフィールドに移動するよー！」

正斗 「ああ、さすがにここでは戦わないだね」

α 「先に対戦チームと、君のパートナーがゲームにログインるんだけど  
早く来いってうるさくてうるさくて」

正斗 「パートナー？」

α 「マサトのパートナーは『クルミ ユウキ』

16歳、高校1年生。女の子、だよ！」

正斗 「くるみ、ゆうき、さん、か」

α 「それじゃ！ 移動するよお！ えい！」(指を鳴らす)

α、指を鳴らす。

電子的な音が鳴り響き、転送されていく。

高速で書きかえられていく。

正斗 「うっー！」(まぶぶしくて目を閉じる)

電子的な書き変えの音が、徐々に消えていく。

ぶわっと夜の風が強くふく。

1・9 ラスト・デザイナー内 中学校の屋上・夜

移動したのは、中学校の屋上。十夜の思い出の場所である。

α 「とうちャーく！」

正斗 「ん……（目を開く）ここは」

屋上に風が吹く。正斗、ここが学校の屋上だと気づく。

正斗 「学校の屋上？」

勇希 「まったく、待ちくたびれたぞ！」

正斗 「え？」

ふたたび風がぶわっと吹く。

勇希、正斗の前まで歩いてくる。

勇希 「よお、お前が私の相棒ってわけか」

正斗 「えっと……、君は……」

勇希 「私の名前は久留巳勇希。さっそくだが相棒、私を全力で守ってくれ！」  
(ハツラツ)

正斗M 「僕はこの仮想世界で、僕の運命を全て変えてしまう彼女と出会った」  
(モノローグ)